マスが行った徹底的なギリシア教父神学の研究を通じて，かれの神学，ひいてはカトリック神学における大きな転機がもたらされた，という指摘などをその例として記しておこう。

著者は第一章の冒頭で，19世紀後半以来のいわゆるネオ・トミズム運動のなかで，トマスの詳細な歴史的研究に従事する歴史家と思弁的な「トミスト」との間に不幸な分離が起り，これが今日におけるトミズムの衰退を招いた，とのべている。トマスの教説の充分な理解のためにはこれら二つのアプローチのいずれをも欠いてはならないが，著者によるとそれらは相互排除的ではなく，むしろトマスの教説は，それらを厳密に歴史的コンテクストのなかにおいて理解するときにのみ，その超歴史的な意義があきらかになる，というのである。さらに著者は序言において，つぎの2，30年の間にトマス研究への新たな関心のたかまりが見られるであろうが，それはカトリックの研究施設においてではなく，世俗の大学や研究者の間において起るであろう，と予測する。いずれにせよ，著者は本書においてトマス研究に関心を有する者にたいして，さきにものべたように，現在のトマス研究の問題領域の見取り図ともいうべきものを提示しており，そこに本書の有用さがあると思う。

井筒俊彦著：イスラーム思想史

昭和50年11月　岩波書店　362頁

柏　木　英　彦

コーランの邦訳を公刊されて後，井筒俊彦教授はカナダ，マックギル大学イスラーム学研究所にあって画期的な仕事を続々と公にされてきたが，昨年アンリ・コルバン，レイモンド・クリバンスキーのような第一級の学者とともにイラン王立アカデミー会員に就任され，ペルシャ哲学，東西比較思想の研究に専念されている。

この間，教授はその成果をすべて英文で発表されてきた。イスラーム思想史に関

するものとしては，コーランに見出される宗教倫理の基本語を分析しその構造を明らかにした The Structure of the Ethical Terms in the Koran (1959)〔後に Ethico-Religious Concepts in the Qur'an という題で改訂された〕，コーランにおける神と人間の関係を精密に分析しつつその世界観を解明した God and Man in the Koran (1964)，イスラーム史上きわめて重要でしかも難かしい問題である信仰 (Îmān) の概念構造とその変遷を鮮やかに描き出した The Concept of Belief in Islamic Theology (1965) の三書がある。類稀な語学力と意味論的分析法を駆使して，上代イスラームの精神構造を見事に浮彫にしたこれらの著作は，イスラーム圏の知識人に深い感銘を与えた。西洋哲学，インドおよび中国哲学，日本思想にも造詣の深い教授は，続いて比較思想に関する著書を二点公刊されている。イブン・アラビーと老荘の思想を分析し両者の比較を試みた A Comparative Study of the Key Philosophical Concepts in Sufism and Taoism, 2vols. (1966～67) と，四つの論攷を収めた The Concept and Reality of Existence (1971) であり，その中の一論文 An Analysis of Waḥdat al-Wujūd〔存在の唯一性〕—Toward a Metaphilosophy of Oriental Philosophies は標題自体が教授の関心の方向を示している。すなわち東西両世界の相互理解を哲学的次元で行なうため，哲学的共通言語をつくるという課題である。人はとかく井筒教授の天才的語学力についてのみ語りがちであるが，むろんこれなくしてその業績は達成しがたかったにしても，アンリ・コルバンと並ぶ斯界の第一人者として教授の地位を定めたのは，哲学的意味論 (Philosophical Semantics) とも呼ばれている斬新な意味論的分析法を介して，ムスリムの発想の特質を浮かび上らせた独創性によることを銘記すべきであろう。因みに，この方法は，膠着状態に陥っている西洋中世哲学研究にたいしても示唆的であり，新しい視点を提供することは疑いない。

東西の文化に精通している教授は，エラノス学会をはじめ欧米での講演，寄稿に多忙であるにもかかわらず，このたび実に17年ぶりに邦文著書『イスラーム思想史——神学，神秘主義，哲学』を公刊されたのは，まことに慶賀すべきことである。本書については，すでに今道友信教授が『思想』1976年3月号（岩波書店刊）に「イスラームへの知的誘ひ」と題する興味津々たる一文を寄せられ，改めて付け加える事はないほど行き届いた書評をされているので，ここでは若干の感想と希望を

記すにとどめたい。

本書は，著者が昭和16年に上梓された『アラビア思想史』を，その後著しい進歩を見たイスラーム学の現状に照して，改訂増補されたものである。この30年間イスラーム学を飛躍的に発展せしめた推進者の一人アンリ・コルバンの『イスラーム哲学史』は，独自の現象学的方法によりムスリム特有の発想形態を照射して余す所のない革命的ともいうべき名著であるが，徹底的にシーア派的視点に立脚しているため，通史としてはいささか偏向を否定しがたい。これにたいし井筒教授の『イスラーム思想史』は「それぞれの領域における最高の思想家」のみを主題的に取り上げ，第一期つまり13世紀の転換期までの「一貫した見通しを提供しようとする」正統的な通史であり，しかもすべて原典に依っているから，われわれは最も信頼に足るイスラーム哲学史を手にしたわけである。

旧著『アラビア思想史』は回教神学と回教哲学の二部から成っていたが，本書はイスラーム神学，イスラーム神秘主義（スーフィズム），東方スコラ哲学，西方スコラ哲学の四章から構成されている。第二章スーフィズムが新たに増補され，さらにイブン・アラビーと純正同胞会の二項が付け加えられ，代りにイブヌ・マスカワイヒが削除されたことが旧著との大きな相違である。なおアラビア語原文は，重要な用語以外すべて省かれている。徹底した原典主義に加えて，ギリシャおよび西洋中世哲学への言及が随所に見られることは本書の特色であり，また原典の西欧語訳と研究書に加えられた著者ならではの寸評はわれわれにとって貴重な導きである。

本書の冒頭に置かれている「アラビア沙漠の精神とコーラン」は，読み返すたびに見事な導入部を成していると感嘆する。アラビア人は元来視覚と聴覚が異常に鋭く，個物を尊び，直観的，非論理的，物質主義的な特異な精神の持主であった。ムハンマドはその典型であり，イスラーム思想史を正しく理解するためには，コーランがこの非論理的，感覚的精神の産物たることに充分留意せねばならないと著者は説く。「視覚的イマージュに満ち」ている点こそ，コーランが多神教と偶像崇拝のアラビアに急速に拡まった一因である。眼に見えないものは決して信じなかったアラビア人に，コーランは神を眼に見えるように描き，万物に神の力が顕現していることを教えた。だがコーラン自体本質的に非論理的であるから，やがて整合性を求める試みが生じ，またイスラームの伸張とともにアラビア人の現実主義，感覚主義，

個物主義は，全く異質の諸文化圏の精神性と出会い衝突し，ここに多彩なイスラーム思想史が展開する。

イスラーム法学の基礎概念，思弁神学の誕生，ムアタズィラ派の合理主義，アシュアリーの思想，イマーム・ハラマインの思弁神学，ガザーリーにおける理性と信仰の問題を論ずる第一章には，四章中もっとも多くの頁がさかれており，なかでもイマーム・ル・ハラマインすなわちジュワイニーは，コルバンの哲学史では名前が挙げられているにすぎないのに比し，著者はその体系を詳論して当時の思想界の状況を覗わせるよう周到な配慮を示している。一方，バスターミー，ジュナイド，ハッラージュを頂点とする初期スーフィズムを解説する第二章に，他の章よりはるかに少ない四十頁しか当てられていないのは，いかにも残念な気がする。イスラーム思想史を貫く特色と考えられるスーフィズムについてコルバンは比較的簡単に済ませているし，アナワティ，ガルデ共著 Mystique musulmane (1961) は「内容的に信頼できない」と却けられていることでもあり，何よりもスーフィズムこそ著者の資質に最も相応しい領域であるから，いま少し詳しく論じて戴きたかったと思う。

西洋中世哲学の研究者にも親しいキンディー，ファーラービー，イブン・スィーナーの哲学，ガザーリーによる哲学批判を扱う第三章で，著者はコルバンの哲学史が邦訳されている点を顧慮したためであろうか，スコラ哲学的側面に焦点をしぼっているように思われる。キンディーのアラビア語原文がイスタンブールで発見されて，その「哲学の性格がはっきりしてきた」ところであり，ファーラービーの著作の写本も近年発見されて，次第に「全体像が見えるようになってきた」というのが現状であるとすれば，その全貌の解明は今後の研究に俟たねばならないのであろう。中世西欧のスコラ学者にも知られていたイブン・スィーナー『治癒』の体系は，彼自身によればギリシャ哲学の遺産を「イスラーム的コンテクスト」において知識人に提供したものにすぎない。彼独自の本当の思索を展開したという「東方哲学」を開陳した20巻の著作は散佚して伝わらないが，しかしその秘教的性格を覗わしめる作品が若干遺されている。最後の部分で神秘主義に触れ，文体も「普段の形式的な言葉使いを棄てて独特の美しい言葉を語り出す」晩年の作品『指示と勧告』を，その片鱗なりとも紹介してほしかった，といえば望蜀との譏りを受けるであろうか。が，A・ゴワションのフランス語訳は「誤訳が余りに多くて使いものにならない」

と一蹴されている以上，われわれには垣間見る手立がないのである。ついでながらゴワションについては Lexique de la langue philosophique d'ibn Sīnā は「役立つ」が，ラテン・スコラ学の研究者が一度は繙く La distinction de l'essence et de l'existence d'après ibn Sīnā は「信用できない」と評されていることを付記しておこう。ともあれ筆者は，第四章ともども本章に「スコラ哲学」という標題が付されていることを遺憾に思わないわけにはゆかない。今道教授も「著者とアリストテレスとは本来無縁なのである」と断じている。

イブン・バーッジァ，イブン・トファイル，イブン・ルシドなど中世スペインの思想家に当てられた第四章に，難解をもって鳴る深遠な思想家イブン・アラビーが加えられたことは幸いである。四百にのぼる厖大な著作をものし「論理的であると同時に幻想的，壮麗雄渾な組織をもちながら而も雑然として無秩序な世にも奇異な神秘的形而上学」を樹立したイブン・アラビーは，ある日ムルシアで見たヴィジョンで神の座の周囲に飛び交う鳥が命じたのを機会に東方へ旅立ち，以後東方イスラーム世界で開花するイルファーン哲学の基礎となる。

イスラーム哲学はアヴェロエスをもって終るどころか，13世紀から17世紀に到る第二期こそ，イスラーム思想が「最も顕著な独創性を発揮した時期」である。この時代の文書の多くは写本のまま解読を待っている現状であるが，著者はすでにこの時期について研究を深め，原典邦訳の計画もあると聞く。ジャラールッ・ディーン・ルーミー，ハイダル・アーモリー，ミール・ダーマード，モッラ・サドラー・シーラージーなど魅力的な思想家の登場するこの第二期について，著者の手になる本書続編を希むのは筆者一人ではないであろう。

最後に，なお一つ希望を述べさせて戴く。井筒教授は昭和27年に『マホメット』を公刊されているが，当代の精神状況をまざまざと再現して見せたこの比類なき名著を支えている一要素は，著者がアラビアの詩文に通暁していることであろう。そこでぜひともアラビア詩を素材に，日本語で「アラビア精神史」を書いて戴きたいと切望する次第である。『マホメット』の読者で，あの迫真性から受けた感銘を新たにしたいと願わぬ人はあるまい。